

オーストリア＝ハンガリー二重帝国による  
ボスニア領有とイスラーム教徒移住問題

米岡 大輔

1908年に二重帝国が併合したボスニアでは、イスラーム教徒によるオスマン帝国への移住活動が活性化した。長らくオスマン支配下にあったボスニアでは、彼らが土地所有層を主に占めてきたのだった。そのため二重帝国にとって彼らの流出は、セルビア人やクロアチア人による民族主義が高揚する中で、ボスニア領有をも揺るがす極めて重大な課題とされた。そこで本稿では、オーストリアとボスニアの文書館史料を活用し、二重帝国がこの移住活動にいかに対応しようとしたのかを検討した。特に、移住者の帰還をめぐる二重帝国の取り組みに注目し、帝国が国家としての秩序を保守すべくボスニア領有を維持していこうとする過程を浮き彫りにした。

二重帝国は併合後のボスニアで「州籍」という法的帰属を設け、その領有を確固たるものにしようとした。しかし、併合直後から広がったイスラーム教徒の移住活動がそうした状況を困難なものにした。オスマン帝国は、これらの移住者を積極的に受け入れながら、併合時に二重帝国と締結した2月協定に従い、自国領内で彼らをオスマン国籍者として処遇していった。他方ボスニアでは、セルビア人民族主義者が移住者の所有地獲得にむけた活動に従事していたのだった。二重帝国はこの危機を克服すべく、移住者を帰還させ、「州籍」に再び帰属させていこうとしたが、その過程で一つの矛盾を抱えることになった。二重帝国が内政面を考慮し、移住者を帰還させようとするれば、それがオスマン国籍者への介入となり、併合問題を再燃させうる事態に直面した一方、その帰還を進めなければ、内政的な危機を解消できない現実と向き合い続けねばならなかったのである。それでも二重帝国は最終的に、オスマン帝国側の対応の変化にも乗じて、こうした難局を打開する機会を得つつ、一部の移住者を実際に帰還させ、彼らに「州籍」を再び付与していくことによりボスニア領有を果たしていったのであった。